VNU Journal of Science, Foreign Languages 27 (2011) 192-204

初級日本語教科書における形式名詞「の」、「こと」の考察 –教科書内容の再編集を向ける

Tran Thi Minh Phuong*

ハノイ国家大学外国語大学東洋言語文化学部日本語学科

2011 年 6 月 10 日受理

要約. 本稿は日本語における形式名詞「の」「こと」について言及したものである。筆者は 6 冊の初級教科書及び 2 冊の文法解説書を研究対象にして、「の」「こと」の扱い方に関する考察を行った。考察の結果としては、教科書及び文法解説書の文型の中で、「の」しか使われていないと記述されているが、日本語母語話者の言語使用実態では、「こと」にも使われている（ことを見る）。また、「のに使う／のにかかる」の文型は初級教科書及び文法解説書に記述されているが、実際には日本語母語話者の言語使用実態で使われていないということが明らかになった。それで、今後の課題として、教科書及び文法解説書に記述されている内容には、もう一度深く考察する必要があると考える。

キーワード : 形式名詞、初級教科書、 日本語母語話者の言語使用実態、コーパス、 日本語学習者の言語使用.

1. はじめに

形式名詞「の」、「こと」は日本語文法の中で、一つの大切な文法現象で、学習者をよく混乱させてしまう。「の」、「こと」は現在、多くの初級教科書及び教師用文法解説書が扱っている。しかし、その扱い方には、いくつの問題点が潜んでいる。本研究では、それらの問題点を明らかにしたい。

2. 先行研究

これまで、日本語にある他の形式名詞を扱って、教科書考察を行った研究は、小池（1996）[1]、金森（2007）[2]、田中（1998）[3]があるが、形式名詞「の」、「こと」だけ扱った研究はまだない。初級教科書における記述には、学習者の言語学習及び実際のコミュニケーションに影響を与えるので、教科書での記述が正しいかどうか深い考察が必要となる。そこで、本研究では、初級教科書や文法解説書を研究対象にして、「の」、「こと」の扱い方を考察し、問題点を指摘したい。

3. 考察の方法

本研究で行う考察方法としては、まず、考察対象となる初級教科書や文法解説書の中に、形式名詞「の」、「こと」はどのような順序で提出されているのか、また形式名詞「の」、「こと」の用法がどのように記述されているのかを詳しく記述した上、問題点を指摘する。問題点を指摘するために、初級日本語教科書や教師用文法解説書などに記述されている内容は実際の日本語母語話者の使用実態を十分に反映しているのかどうかという調査方法をとる。調査材料としては、国立国語研究所に開発され、公開され大量に格納された「現代日本語書き言葉均衡

* Tel: 84-0913299099
E-mail: tphuongjapan26@yahoo.co.jp

コーパス」[1]（BCCWJ と略された）及び自然談話データである「名大会話コーパス」[2]のデータベースを用いることである。

4. 考察の対象

本研究では、以下の 6 冊の初級日本語教科書及び 2 冊の教師用文法解説書を概観し、考察を行う。

『Situational Functional Japanese Volume 2: Notes Second Edition』[4]

筑波ランゲ-ジグループ、凡人社、1995（以下では、『①』と略称）

『Situational **Functional** Japanese Volume 3: Notes Second Edition』[5]

筑波ランゲ-ジグループ、凡人社、1995（以下では、『①』と略称）

『みんなの日本語初級 I　本冊』スリーエーネットワーク（編）、スリーエーネットワーク、1998（以下では、『②』と略称）[6]

『みんなの日本語初級 II 本冊』スリーエーネットワーク（編）、スリーエーネットワーク、1998　（以下では、『②』と略称）[7]

『実力日本語（下）』、東京外国語大学日本語教育センター、凡人社、2000

（以下では、『③』と略称）[8]

『*Japanese for Busy People I (Revised edition)*』、国際日本語普及協会、講談社インタ-ナショナル、1994　（以下では、『④』と略称）[9]

『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』、白川博之監修、庵功雄、高梨信乃、中西久実子、山田敏弘著、スリーエーネットワーク、2001（以下では、『ハンドブック』と略称）[10]

『A Dictionary of Basic Japanese Grammar』、Makino, S.and M.Tsutsui、The Japan Times, Tokyo、1989（以下では、『DBJG』と略称）[11]

4.1. 上記の初級教科書及び教師用文法解説書を扱った理由

上記の教科書を扱った理由は 2 点ある。まず、第 1 点は、いずれの教科書も日本語学習がまったく初めての者向けに書かれたもので、日本語教育機関において広く使用されている教科書であるということである。第 2 点として、いずれの教科書の対象者も日本語学習初心者であるが、それぞれ異なる対象者を扱っているため、形式名詞「の」、「こと」の提出順序及び記述に、どのような類似点・相違点が見られるのかを見たいからである。

また、教師用文法解説書を上記の 2 冊を選択した理由は、いずれも日本語教育に携わっている人が授業準備の際に参考にすることの多い文法解説であると思われるからである。

4.2. 上記の教科書の特徴

それぞれの教科書の特徴を以下に述べる。

『①』は、日本の大学で勉強したり、企業や研究所などで研究したりすることを目的に来日した学習者向けのものである。『①』は、3 分冊からなっており、各巻は 8 課ずつで、全部で 24 課ある。形式名詞「の」、「こと」は、第 16 課、第 18 課、第 20 課、第 23 課で扱われている。

『②』は、職場、家庭、学校、地域などで日本語によるコミュニケーションをいますぐ必要としている外国人向けに作られているもので、会話の場面や登場人物など学習者の多様化に対応して、より汎用性の高いものとする。『②』は、2 分本冊からなっており、それぞれ全 25 課で構成されている。形式名詞は、第 18 課、第 19 課、第 38 課で扱われている。

『③』は、大学・大学院など高等教育機関で学ぶ学習者を対象に日本語教育用教材として

---

[1]『現代日本語書き言葉均衡コーパス』とは，国立国語研究所が構築を進めている現代日本語の大規模なデータベースである。最終的な規模は 1 億語以上，本年度から 2010 年度までの五か年で構築を終え，2011 年の春には一般公開する予定である。構築作業の一部は文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「日本語コーパス」の補助によって実施している。

[2]『名大会話コパース』は、科学研究費基盤研究（B）（２）「日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究」（平成 13 年度～15 年度、研究代表者：大曾美惠子）の一環として作成されたもので、２名から４名の話者による約 100 時間の雑談を収録、文字化したデータである。

編集されたものである。全 60 課の構成で、『上』と『下』の二部に分かれている。第 31 課、第 35 課、第 38 課、第 39 課、第 51 課で、形式名詞「の」、「こと」が扱われている。

『④』は、仕事などのかたわら日本語を学習する一般社会人向けで、言語構造を段階的に積み上げて学んでいく方法と、場面を取り上げて機能中心に学習を進めていく方法がバランスよく取り入れられた教科書である。全 25 課構成で、第 3 課、第 4 課、第 11 課、第 14 課、第 15 課で形式名詞が扱われている。

いずれの教科書を見ても、形式名詞「の」、「こと」は、初級で学ぶべき文型・文法事項と考えられている。そこで、次に、どのような用法の形式名詞「の」、「こと」を取り上げるのかを具体的に見てみよう。

5. 上記の初級教科書および教師用文法解説における「の」、「こと」の概観

5.1. 初級教科書における「の」、「こと」の概観

『①』では、形式名詞「の」、「こと」両方を提示して、その使い分けについては、「一般に、会話では、「の」が「こと」よりもよく使われている」(p.216) と説明されている。また、「の」と「こと」の違いは以下の通りに記述されている。

- 「の」専用の文：「～のを見る／聞く」「～のが見える／聞こえる」

(1) きのう田中さんが本屋に入るのを見ました。

(2) 電話がなっているのが聞こえませんか。

- 「こと」専用文は以下のような場合である。

・「N は N です」という文型

(3) 私の趣味は本を読むことです。・可能表現：「～ことができる」

(4) 日本語で手紙を書くことができません。

・経験の有無を述べる表現：「～ことがある」

(5) A: 富士山を見たことがありますか。

B: いいえ、見たことがありません。

・ある出来事が決定したことを表す表現：「～ことになる／にする」

(6) A: これから飲みに行こう。

B: いや、残念だな。今から木村先生と会うことになっているんだ。

(7) A: 夏休みはどうするの？

B：北海道に行くことにしたよ。

- 「こと」より「の」をとりやすい：「上手だ」「下手だ」「好きだ」「嫌いだ」「いやだ」

(8) 私は歌を歌うのが下手です。

『①』で扱った「の」、「こと」の違いは、主文動詞の種類によってである。(1) と (2) のように、主文動詞が知覚動詞の場合、「の」が選択される。(3) (4) (5) (6) の場合は、一定の慣用表現として、「こと」しか使わない。(8) は、形容詞述語の場合は、「の」のほうがとりやすいとされている。

『②』では、まず、形式名詞「こと」の場合においては、辞書形の導入と共に能力や状況の可能性を表す表現の「～ことができます」「～N は～ことである」、タ形の導入と共に経験の有無を表す表現「～ことがある」を導入するが、それ以外の「こと」の用法を導入しない。すなわち、補語の役割をはたす用法にふれない。具体的な用例は以下の通りである。

(9) ミラーさんは漢字を読むことができます。

(10) 相撲を見たことがあります。

一方、形式名詞「の」の場合は次のように 5 つの文型に分けてかなりの種類の述語とともに導入されている。ただし、述語の種類が多いのは、形容詞で、動詞述語の場合は、「忘れる」と「知っている」の二つの動詞のみ扱われている。詳細には以下の通りである。

- V 辞書形＋のは＜Adj＞です。

動詞の辞書形に「の」をつけて名詞化したものが文の主題になり、何かをすることについての感想、評価を述べる。この文型でよく用いられる形容詞は「難しい」「やさしい」「おもしろい」「楽しい」「気持ちがいい／悪い」「危険」「大変」などであると説明している（「教え方の手引き」II、p. 126）。

(11) 朝早くさんぽするのは無理です。

- V 辞書形＋のが＜adj＞です。

動詞の辞書形に「の」をつけて名詞化したものが「私は N が好きです／嫌いです」「～さんは N

が上手です／下手です」の N の部分に用いられ、何かをすることについての嗜好、能力を表現する。この文型でよく用いられる形容詞は「好き／嫌い」「上手な／下手」「早い、速い、遅い」などであると説明している（「教え方の手引き」II、p.127）。

(12)　私は絵をかくのが下手です。

- V 辞書形＋のを忘れました。

動詞の辞書形に「の」を付けて名詞化したものが、「N を忘れます」の目的語 N の部分に用いられ、しなければならない、またはする予定だったことをするのを忘れたことを述べると説明されている（「教え方の手引き」II、p.128）。

(13)　電気を消すのを忘れました。

- V 普通形＋のを知っていますか。

「の」の前には動詞の普通形が来る。「の」の前の節で述べられている情報を聞き手が知っているかどうか尋ねる表現であると説明されている（「教え方の手引き」II、p.129）。

(14)　あした田中さんがたいいんするのを知っていますか。（『②』II：104）

- 普通形＋のは N です。

文に「の」を付けて名詞化したものを「は」で主題としている。この「（文）のは～です」で一番言いたいところは「～」の部分である。「（文）」の部分は修飾節になっているので、その中では主題の「は」は用いられない、また述語は普通形になると説明している（「教え方の手引き」II、p.130）。

(15)　一番大切なのは家族の健康です。

形式名詞「の」のおいては、上記の五つの文型以外に、「ために」とともに、「動詞辞書形＋のに」「名詞＋に」の文型を、目的を表す表現として導入する。名詞や名詞句「辞書形＋の」に助詞「に」がついて、「使います」「いいです」「かかります」「要ります」などと共に用いられ、用途、評価、時間、経費などを表すと説明されている（「教え方の手引き」II、p.162）。

(16) このはさみは花を切るのに使います。

『②』で形式名詞「の」、「こと」の記述については、「こと」の場合は、一定の慣用表現のみ提示し、「の」の場合は、述語の成分に分け、提示されたが、形容詞述語に関しては、『①』と同様に、感想・評価・能力・嗜好を述べる際に、「～のは／が～」が使用される。動詞述語に関しては、「忘れる」「知っている」のみ扱った。この教科書の用例では、「知っている」は「こと」に言い換えても不自然にはならないが、「忘れる」のほうはいずれも「の」のほうが自然である。「忘れる」動詞が使用された場面は限定されている。すなわち、忘れたことを思い出した瞬間の発話である。事態そのものは過去のことであるが、思い出したのは今で、その意味で「同時性」があるといえるだろう。

(17) A:　あ、いけない。

B: どうしたんですか。

A: 机の鍵をかけるのを忘れた。

『③』は、調査対象となる 6 冊の教科書の中で、もっとも詳しく記述されている教科書である。提示した文型の詳細は、以下のようなものがある。

- 「～ことができる」

『③』は、可能を表す表現「～ことができる」を提示しながら、可能動詞の相違点にふれている。「ことができる」は文章語的であり、名詞句としては長いので使用を避ける。また、「ことができる」は他動性の低い動詞に使われるとされている（「文法解説書」下、p.132）。

(18) 田中さんは英語を話すことができます。

- 「～したことがあります」　過去の経験を表す表現である。

(19) 私は外国へ行ったことがあります。

(20)- 「～することがあります」

日常生活の中で、その事柄がしばしば生じる、又はめったに生じないこと等について取り立てて言及する表現であり、常識的にいつでも生じる事柄には用いないとされている（「文法解説書」下、p.136」。

(21) 王さんは時々休むことがあります。

- 「～する／しないことにします」

予定の行動を起こす／起こさないという決定を下す表現である。

(22) 私達はレストランで食べることにしました。

●「～することになります」

「～することにします」と同様に、決定を下す表現であるが、事の成り行きでそうなってという事前の状況変化として述べる。人が意志的に述べた場合でも、この表現が用いられることが多い。（「文法解説書」下、p. 138）。

(23) 会議は 4 日から始まることになりました。

● 「～は～することです」

「動詞辞書形＋こと」で名詞句を作る。「～は～です」という判断文の主語も述部も、名詞か名詞句でなければならない（「文法解説書」下、p. 139）。

(24) 私の夢は科学者になることです。

● 「～のは～からです」

「〔結論〕のは〔理由〕からです」という理由後置文となると説明されている。

(25) 休んだのは用事があったからです。

●「～のは～です」

文中の強調する部分を「～は～です」という判断文の形で述べる。文末の述語は名詞であるとされている（「文法解説書」下、p. 142）。

(26) 休んだのはきのうです。

● 「～のを見る／聞く」

「見る、聞く、見える、聞こえる、見つける、眺める」等、同一場面で起こる感覚現象の対象を表わす時、「の」を使うとされている（「文法解説書」下、p. 165）。

(27) 日が沈むのが見えます。

● 「～のを手伝う／待つ」

次のような同一場面で起こるという密接性のある動詞は特に「の」を使うとされている（「文法解説書」下、p. 165）。

(28) 荷物をおろすのを手伝います。

●「～のに～」

「使用、必要、有用」について言う時である。「何についてそれを言うか」、は「に」で表す。名詞は直接「に」がつく。動詞は「のに」がつく（「文法解説書」下、p. 165）。

(29) この車は荷物を運ぶのに使います。

上記のことをまとめると「の」、「こと」の違うについては、次のように述べている。

「の」、「こと」は両方とも名詞節を作る。どちらでも使えることがある。しかし、次の場合はどちらか一方しか使えない。

「の」は、感覚によって直接体験できる、具体的な事態に使う。「の」自体は何の意味もない。ただその節を名詞化する機能があるだけである。分裂文の場合は、「～のは～」で取り立てる。一方、「こと」は抽象した概念を表す。事柄を表す名詞であり、可能・経験・決定を述べる際に用いられる。また、文全体を名詞節にする機能がある（「文法解説書」下、p. 166）。

『③』で提示した「の」、「こと」の違いについては、かなり詳細的に説明されている。『①』と『②』と同様に、主文動詞の種類によって、「の」、「こと」の選択が決められる。また、名詞節の内容によって、「の」、「こと」の違いを述べる。

『④』は、辞書形の導入と共に、能力と可能性を表す表現「～ことができる」を導入した。タ形の導入とともに、過去の経験の有無を表す表現「～たことがある」を導入した。例えば、

(30) 一年中泳ぐことができます。

(31) 北海道へ行ったことがありますか。

「V＋ことにする」は二つ以上の選択肢の中から考慮した結果、話し手が決定したことの報告・表明を表す際に使用されるとしている。また、ニュース原稿などの報道文は別として一般に第三者の意志決定の報告は伝聞や推量表現を使うことが多いと説明している（「教師用指導書」、p. 153）。

(32) こちらは今度東京本社に勤務することになった佐藤さんです。

「V＋ことになる」は物事が決まるまでのプロセスや誰が決めたかは問題ではなく、結果だけに焦点を当てるとき、使用されると説明されている。一定の慣用表現以外の用法については、文型事項として、「～ことを知っていますか」しか提示しなかった。「の」の用法に関しては全然ふれなかった。

(33) 一ヶ月研修しなければならないことを知っていますか。

一方形式名詞「の」は、助詞「は」「が」と共起する場合は、題目語の役割を果たす。助詞「を」と共起する場合は、文の補語になる。名詞句と呼ばれている。また、知覚動詞「見えます」「聞こえます」と共起する場合は、名詞句にある事柄は主文の事柄と同時に行うということとされている（「教師用指導書」、p. 154）。

（34）すもうを見ながらやき鳥を食べているのが見えますよ。

上記の 6 冊の日本語教科書を見た結果をまとめると、形式名詞「の」、「こと」の扱いは様々であるが、共通点としては、「～ことができる」「～（た）ことがある」「～ことにする／なる」という表現は、いずれの教科書においても一定の慣用表現として提示されている。また、「の」、「こと」の違いについては、殆ど主文動詞の種類によって「の」、「こと」の選択が決められるとされている。

一方、異なる点としては、まず提出順序にはばらつきがあることが挙げられる。おそらく、教科書の構成自体が違うため、提出順序が異なると思われる。次に、形式名詞「の」、「こと」の記述には、形式名詞「の」、「こと」が用いられた構文に分け、またその意味についての説明がある。その中で、詳しく説明する教科書もあり、あまり詳しく説明しない教科書もある。「～ことがある／ことができる／ことにする／ことになる」のような一定の慣用表現以外の用法については、「の」または「こと」一方しか取り上げていない教科書もあり、「の」、「こと」両方取り上げ、使い分けの違いを記述する教科書もある。

5.2. 教師用文法解説書における「の」、「こと」の概観

まず、『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク、（以下『ハンドブック』と略称）を見てみよう。記述されている用法は以下の通りである。

- 「～たことがある／～たことがない」

経験の有無や経験を述べる表現であると説明されている。

（35）彼はアメリカに行ったことがある。

- 「～ることがある」

「～」で表される動作や出来事が行われる／起こる場合があるということを表す。

（36）田中さんは友人とお酒を飲みに行くことがある。

- 「～ことになる」「～ことにする」

ある出来事が決定したことを表す表現が「ことになる」である。ある出来事を話し手が主体的に決めたことを表す表現は「ことにする」である。

（37）会議は 6 階の会議室で行うことにしました。

（38）会議は 6 階の会議室で行うことになりました。

- 「～の」「～こと」

上記以外の用法については、「の」、「こと」は埋め込み表現として扱われた。次のように説明されている。

・「こと」「の」は様々な表現を名詞化する機能がある。名詞に接続する形は、「こと」と「の」は違う。

（39）a.　田中くんの妹が女優な{×こと／○の}はみんな知っています。

b.　田中くんの妹が女優である{○こと／○の}はみんな知っています。

・「こと」と「の」は多くの場合置き換え可能であるが、一方しか使えない場合もある。「こと」しか使えない場合は次のような場合である。

・後ろに来る動詞が「話す、伝える、約束する、命じる、祈る、希望する、聞く（話を）」など主に発話に関係する動詞の場合。

（40）ゼミに出られない{○こと／×の}を先生に伝えてください。

（41）ご病気が早くよくなる{○こと／×の}を祈っています。

・後ろに「です、だ、である」がくる場合。

（42）私の趣味は映画を見る（○こと／×の）です。

・「ことができる」「ことがある」「ことにする」「ことになる」などの複合表現の場合。

（43）あの女優は一週間で 100 万円稼ぐ{○こと／×の}ができる。

（44）私は外国で暮らした{○こと／×の}があります。

一方、「の」しか使えない場合は、以下のような場合である。

・後ろに来る述語が「見える、見る、聞く（声、音を）、聞こえる」などの知覚を表す動詞の場合

（45）公園で和子さんが走っている{×こと／○の}が見えます。

（46）隣の家で誰かが叫ぶ{×こと／○の}が聞こえた。

・後ろに来る述語が「待つ、手伝う、邪魔する、写す」などある事態に合わせて行う行動の場合

（47）子供が寝る{×こと／○の}を手伝ってください。

（48）このパソコンを運ぶ{×こと／○の}を手伝ってください。

・後ろに来る述語が「やめる、とめる」の場合

（49）雨なので花見に行く{×こと／○の}をやめました。

・後ろに来る動詞が「話す、伝える、聞く」などの場合、次のように「こと」の前に「という」が用いられることがある。

（50）ハイキングが中止になったということを学生に伝えた。

- 「～のに（目的）」

「～のに」は、「使う、使用する、用いる、役に立つ」などの使用を表す動詞や形容詞で表される「必要だ、便利だ、有用だ」などの目的を表すのに使われる。

（51）この道具は野菜の皮をむくのに使います。

- 「～のは～からだ」

「～のは～からだ」は強調構文と説明している。

（52）図書館が混んでいるのは、試験が近いからだ。

次に、『A Dictionary of Basic Japanese Grammar』The Japan Times，Tokyo.（以下

DBJG と略称）を見てみよう。形式名詞「の」、「こと」は以下のように記述されて

いる。

- 「こと」について

・「こと」は抽象的な意味を表す。形容詞・動詞・節を名詞化する機能がある。「こと」が使用されるとき、話し手はその言及された出来事を直接体験するわけではないということを表している。だから、「こと」は「見る、手伝う...」のような動詞と共起しない。

（53）僕は静江が泳ぐの／*ことをいていた。

（54）ジェーンはビルが洗濯するの／*ことを手伝った。

・「知っている」「話す」「忘れる」のような動詞と共起する。

（55）スイスがきれいなことは写真で知っています。

・文中で題目語になったり、補語になったりする。文末を名詞化する

（56）困ったことは彼が来られないことだ。

・「～たことがある」

誰かが何かをやった経験があることを表す表現である。

（57）私はヨーロッパへ行ったことがある。

・「～ることがある」

ある動作や出来事が行われる／起こる場合があるということを表す。「よく」「ときどき」「たまに」とよく共起する。

（58）私はたまに朝ふろに入ることがあります。

・「～ことができる」可能・能力を表す表現である。

（59）田中さんは中国語を話すことができる。

・「～ことになる」ある出来事が決定したことを表す表現である。

（60）私は来年大阪に転勤することになった。

・「～ことにする」ある出来事を話し手が主体的に決めたことを表す表現である。

（61）私は会社をやめることにしました。

● 「～の」について

・「の」は「こと」と同様に、形容詞・動詞・節を名詞化する機能がある。文中では、「の」は題目語になったり、補語になったりする。文末を名詞化する機能がない。

（62）困ったのは彼が来られない（こと／*の）だ。

・「の」が使用されると、話し手は文中で言及されたことを直接体験することを表す。だから、「見る、手伝う...」のような動詞と共起する。

（63）僕はひろ子さんがピアノを弾いているのを聞いた。

・「～のは～のことだ」ある出来事が起こった時点を表す表現である。

（64）吉田さんと最後に会ったのは 1985 年の五月のことだ。

・「～のに～」目的を表す表現である。

（65）私は日本語の新聞を読むのに辞書を使う。

・「～のは～だ」「～のは～だ」は強調構文としている。「の」は、「時間」「人」「所」「理由」などを代用する。

（66）このクラスで一番頭がいいのは吉田さんだ。

「の」、「こと」の違いについては

「の」の場合は、名詞節にある出来事は具体的な内容を表し、「こと」の場合は、抽象的な内容を表すと説明している。また、「の」しか取らない動詞、「こと」しか取らない動詞、「こと」「の」両方とる動詞・形容詞をリストアップしている。以下の表 1[(3)] でまとめた。

二つの文法解説書における形式名詞「の」、「こと」の扱う結果をまとめると、共通点としては、いずれも「の」、「こと」の違いについては、主文動詞の制約が働くというものである。また、「～ことがある」「～ことができる」「～ことにする」「～ことになる」のような形式が一定の慣用表現として取り上げられている。一方、異なる点としては、「の」、「こと」の使い分けの違いを述べる際に、『ハンドブック』は、主文動詞の種類のみ述べているが、『DBJG』の場合は、主文動詞の種類のみでなく、名詞節の内容も説明されている。また、『ハンドブック』は「の」か「こと」一方しか使えない場合のみ取り上げているが、『DBJG』は、「の」か「こと」一方しか使えない場合を、「の」、「こと」の両方を取る場合にもふれている。

上記は、日本語教科書及び教師用文法解説書などを概観した結果である。分かりやすくなるため、その結果を再度、表の形で示す。その扱いの結果を以下の表 2 及び表 3 でまとめた。

(3) 本稿での表は筆者が作成した。記号の意味は以下のように記述されている。
「ｖ」は、gramamatical or acceptable、「＊」とは、ungramamatical or unacceptable、「？」は、The degree of unacceptability is indicated by the number of question marks three being the highest(DBJG における List of symbols、p.xi から引用)

表 1　DBJG における「の」、「こと」の選択に関する動詞・形容詞リスト

動詞	の	こと	動詞・形容詞	の	こと
見る	v	＊	覚える	v	v
見える	v	＊	認める	v	v
聞く	v	＊	避ける	v	v
聞こえる	v	＊	後悔する	v	v
感じる	v	＊	分かる	v	v
止める	v	＊	好きだ	v	v
待つ	v	＊	嫌いだ	v	v
見つける	v	？	怖い	v	v
ふせぐ	v	？	うれしい	v	v
知る	v	v	悲しい	v	v
忘れる	v	v	難しい	v	v
気が付く	v	v	期待する	？	v
思い出す	v	v	信じる	？？	v
すすめる	？？	v	頼む	？？	v
考える	＊	v	できる	＊	v
命じる	＊	v	ある	＊	v
すすめる	？？	v	する	＊	v
よる	＊	v	なる	＊	v

（『DBJG』：194-201, 203-206, 313, 318-322 より）

表 2　　日本語教科書などで「こと」の扱い内訳
「○=扱われている　×=扱われたいない」

構文	DBJG	ハンドブック	みんな	SFJ	実力	Busy
～ことができる	○	○	○	○	○	○
（過去形の動詞）ことがある	○	○	○	○	○	○
（非過去形の動詞）ことがある	○	×	×	×	○	○
～（動詞）ことが（形容詞）だ	×	○	×	○	×	○
～ことが名詞だ	×	○	×	×	×	×
～（動詞）ことは（形容詞）（歩くのは楽しい）	○	○	×	○	×	×
～（名詞）ことは形容詞だ （いい人であることは確かだ）	○	×	×	×	×	×
～（形容詞）ことは（動詞）（面白いことは分かる）	○	×	×	×	×	×
～（名詞）はことだ （私の趣味は本を読むことだ。）	○	○	○	○	○	○
～（動詞）ことは（動詞）ことだ	○	×	×	○	×	×
～ことにする	○	○	○	○	○	○
～ことになる	○	○	○	○	○	○
～（動詞）ことを動詞～	○	○	×	○	○	○

表３　日本語教科書などで「の」の扱い内訳

「○=扱われている　×=扱われていない」

構文	DBJG	ハンドブック	皆	SFJ	実力	Busy
～のは形容詞だ（行くのは嫌だ）	○	×	○	○	×	○
～のは～からだ （学校を休んだのは風邪をひいたからだ）	×	○	×	×	○	×
～のが形容詞だ（寝るのが好きだ）	×	×	○	○	×	○
～のは／が名詞だ （日本へ来たのは去年の３月だ）	○	×	○	×	○	○
～のは～ことだ	○	○	×	×	×	×
～（動詞）のを／（動詞） （持ってくるのを忘れた）	○	×	○	○	○	○
～のに（動詞）（荷物を運ぶのに使います）	○	○	○	×	○	×

６．日本語教科書及び教師用文法解説書における「の」、「こと」の扱い方の問題点

本研究では、日本語教育で形式名詞「の」、「こと」はどのように扱われているのか、その手がかりとなるものとして、初級日本語教科書、教師用文法解説書を概観した。その結果の全体は次のようにまとめることができる。

1.　主文動詞の種類及び名詞節の内容によって、形式名詞「の」、「こと」の選択が決められるとしている。

2.　「～ことができる」「～ことがある」「～ことになる」「～ことにする」などのような表現は、一定の慣用表現として扱われている。つまり、「こと」しか使えない表現としている。

では、初級日本語教科書及び教師用文法解説書などでの形式名詞「の」、「こと」に関する記述には、実際の言語運用が十分に反映されているのだろうか。それを検討するために、筆者は以下の二つの予備調査を行った。

まず、初級日本語教科書や教師用文法解説書などに記述されている内容は実際の日本語母語話者の使用実態を十分に反映しているのかどうかという調査である。調査方法としては、国立国語研究所に開発され、公開された大量に格納された「現代日本語書き言葉均衡コーパス」BCCWJ と略された）及び自然談話データである「名大会話コーパス」のデータベースを用いることである。調査項目については、日本語教科書や教師用文法解説書に記述されているように、「見る」のような知覚動詞は「の」しか選択されていないとされているが、実際の言語運用ではそうであるのか、また「～ことができる」のような一定の慣用表現の場合は、「こと」しか取らないと記述されているが、実際の使用された言語データでは、そうであるのかを調べたいと考えた。この文法項目を調査項目にしたのは、日本語母語話者の言語生活から手がかりを得ているからである。調べた結果は以下の表４と表５で示した。

表４　BCCWJ のデータから調査項目の出現した結果

コーパス名 / 調査項目	BCCWJ				出現合計数
	『白書』	『知恵袋』	『書籍』	『国会会 録』	
①　～いるのを見た	0	13	76	1	90
②　～いるのを見て	0	18	134	1	153
③　～いるのを見る	0	20	55	0	75
合計	**0**	**51**	**265**	**2**	**318**
④　～いることを見た	12	10	13	10	45
⑤　～いることを見て	10	8	10	9	37
⑥　～いることを見る	8	10	7	5	30
合計	**30**	**28**	**30**	**24**	**112**

表 5　名大会話のデータから調査項目の出現した結果

コーパス名 / 調査項目	名大会話
①　～のができる（全活用）	18
②　～ことができる（全活用）	24

上記の表 4 と表 5 で示した日本語コーパスのデータベースから調べた結果をみると、初級日本語教科書や教師用文法解説書での記述には問題点があるということが明らかになった。初級日本語教科書や教師用文法解説書の記述においては、「見る」のような知覚動詞の場合は「の」のみが選択されるとされているが、実際の使用された言語データから調べた結果では、「見る」動詞は「の」のみでなく、数は少ないが「こと」も選択されることが分かった。「現代日本語書き言葉均衡コーパス」では、知覚動詞「見る」は、「の」のみでなく、「こと」とも出現している。また、「こと」との出現した回数は、「の」との出現した回数と比べて、大きな格差があるが、データベースの中に出現したということは、知覚動詞「見る」は「の」のみでなく、「こと」とも使用されたという証明になるであろう。例えば、次のような用例がある。（下線筆者）

(67)　北陽の虻川さんがすごいボ-ル投げているのを見たんだが元ソフトボ-ル

とかの選手だった。『知恵袋』

(68) 彼と接した時、その人の話を聞いた時、されていることを見た時…みんな

が偉い人だなあ…立派な人だな…『書籍』

また、「～ことができる」という表現は、初級日本語教科書や教師用文法解説書で、一定の慣用表現として扱われている。「こと」しか使用されないとされているが、実際の自然談話データである「名大会話コーパス」で調べた結果では、「～のができる」の使用も見られた。使用回数について、「～ことができる」の使用回数と比べ、半分程になった。例えば、次のような用例がある。

(69) うちのお母さんたぶん、何かね、ファックスを受信するのができんらしい。

(70) 帰ることができなくなっちゃって 。『名大会話』

このように、日本語コーパスで調べた結果を通して、初級日本語教科書や教師用文法解説書における記述には問題点があるということが判明された。このことから見ると、その記述には、実際の使用実態が十分に反映されていないということが言える。今度の調査は予備調査として、2 つの文法項目しか調査できなかったが、今後の日本語教育のため、日本語コーパスのような大規模なデータベースで、形式名詞「の」、「こと」に関する一つ一つの文法項目を調べる必要があると考える。

次に行ったのは、初級日本語教科書や教師用文法解説書に取り上げられている基本的な文法項目の中では、実際のコミュニケーションで使われやすい形式や用法が反映されているかどうかを検討する調査である。

小林（2005）では、これまでの初級文法シラバスの文法項目は、実際のコミュニケーションで使われる形式や用法を反映しているのかを見直す必要があると述べられている。小林（2005）の観点を支持し、筆者は、初級日本語教科書や教師用文法解説書に取り上げられている形式名詞「の」、「こと」に関する基本的な文法項目の中では、実際のコミュニケーションで使われやすい形式・用法を反映しているのかを調べてみた。調べた方法としては、64 時間分の自然談話データ『女性のことば・職編場』、『男性のことば・職場編』、『名大会話コーパス』を用いることである。調べた文法項目は、目的を表す表現「（動詞）～のに使う／用いる／使用する」である。この文法項目を調査対象としたきっかけは、自分の日常言語生活の中で、この文法を使う機会があまりなかったことを手がかりとして、調査対象にしたのである。

調べた結果では、目的を表す「（動詞）～のに使う／用いる／使用する」の文法項目は『女性のことば』、『男性のことば』 、『名大会話』、いずれのコーパスにおいても、出現が全く見られなかったが、その代わりに、数は

少ないが同じく目的を表す「（動詞）～時に使う／使用する」の使用が見られた。例えば、次のような用例がある。

（71）お客さんが来た時に使うために言ってんだけども。　『男性』

（72）　粉れは自分の気持ちを強く伝えるときに使いますとかうっかりいっちゃった。

『名大』このように、本章で調べたコーパスにおいて、目的を表す「（動詞）～のに使う／使用する」という文法項目は、初級日本語教科書や教師用文法解説書で殆ど扱われているが、実際の自然な談話データでは、使用されなかったということが分かった。このことから考えると、「（動詞）～のに使う／用いる／使用する」という文法項目は、実際のコミュニケーションで使われる形式を反映しにくいと言えるだろう。言い換えれば、初級日本語教科書や教師用文法解説書で扱われた「（動詞）～のに使う／用いる／使用する」という文法項目は実際のコミュニケーションで使われやすい形式と言いにくかろう。従って、初級レベルの会話授業において、「（動詞）～のに使う／用いる／使用する」という形式を導入し、学習者にいくら練習させても積極的な意義を見出せないだろう。従って、「（動詞）～のに使う／用いる／使用する」という文法項目は、初級レベルにおける文法シラバスに取り入れる必要がないのではないかと考える。

７．まとめ

このように、本研究での調査結果を通して、現在日本語教育で使われている初級日本語教科書及び教師用文法解説書における形式名詞「の」、「こと」の扱いにおいて、二つの問題点があるということが明らかになった。それは、まず、初級日本語教科書及び教師用文法解説書の記述には、実際の日本語母語話者の使用実態を反映していない文法項目があるという問題である。すなわち、初級日本語教科書及び教師用文法解説書では、「の」しか取らないと記述されているが、実際の言語データの調べでは、数が少ないが「こと」もとるということが分かった。次に、初級日本語教科書及び教師用文法解説書での扱いには、実際のコミュニケーションを反映しにくい文法項目があるという問題である。すなわち、殆どの初級日本語教科書及び教師用文法解説書で、基本的な文法項目として取り上げられているが、実際のコミュニケーションで使われやすい形式を反映していないものがあるということが分かった。

上記のことを踏まえ、本研究で調べた初級日本語教科書や教師用文法解説書における形式名詞「の」、「こと」の扱いの結果から、教師の立場から考えると、以下のような 2 点を示唆している。

まず、授業を行う前に、形式名詞「の」、「こと」について、初級日本語教科書や教師用文法解説書で記述されていることを再検討することが必須であろう[12]。すなわち、初級日本語教科書や教師用文法解説書に書いてあることには、実際の言語運用が反映されているのかを日本語コーパスのような大規模な自然データで検証する必要があることを示している。

次に、小林（2005）では、日本語学習者にとって、どのような文法項目が必要であるのか、不必要であるのかを見分けるべきであると述べられていた。学習者が自分のコミュニケーションに必要な日本語を効率よく学んでいくためには「教え方」を工夫するだけでは十分ではなく、「教える内容」についても抜本的な見直しが必要であるということであるとされている。このことから考えると、本調査の結果を通して、形式名詞「の」、「こと」に関する初級文法シラバスにおいては、「（動詞）～のに使う／用いる／使用する」という形式を取り入れる必要がないのではないかと考える[13]。

本研究での調査は、予備調査に留まっているが、形式名詞「の」、「こと」に関する初級日本語教科書や文法解説書の扱いには問題点があるということが明らかになった。今後日本語教育のために、形式名詞「の」、「こと」に関する他の文法項目の調査も重要になり、また詳しい考察も行う必要があると考える。

参考文献

[1] 小池　百合子、初級教科書の考察 - テンス＆アスペクトを中心に - 、*日本語教 育*125 号、1996

[2] 金森　幸子、初級教科書における「もの」の扱い方、*早稲田大学日本語教育研究科論文集*、（2007）148.

[3] 田中達之、初級教科書の問題点、*日本語教育* 127号、（1998）46.

[4] 筑波ランゲージグループ(Tsukuba Language Group), *Situational Functional Japanese* Volume 2: Notes Second Edition, 凡人社(NXB Bonjinsha), 1995.

[5] 筑波ランゲージグループ(Tsukuba Language Group), *Situational Functional Japanese Volume 3: Notes Second Edition*, 凡人社(NXB Bonjinsha), 1995.

[6] 国際日本語普及協会, *Japanese for Busy People I（Revised Edition*, 講談社インタナーショナル), 1994.

[7] スリーエーネットワーク, *みんなの日本語初級 I 本冊*, スリーエーネットワーク（編）, 1998.

[8] スリーエーネットワーク, *みんなの日本語初級 II 本冊*, スリーエーネットワーク（編）, 1998.

[9] 東京外国語大学日本語教育センター, *実力日本語（上）*, 凡人社, 2000.

[10] 白川博之監修, 初級を教える人のための日本語文法ハンドブック, スリーエーネットワーク, 2001.

[11] Makino, S.and M.Tsutsui, A Dictionary of Basic Japanese Grammar, The Japan Times Tokyo, 1989.

[12] Tran Thi Minh Phuong, 日本語学習者における「の」、「こと」の習得－ベトナム 語母語話者の場合－ *早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文集*, (2009）120.

[13] Tran Thi Minh Phuong, 形式名詞「の」、「こと」の使い分け , *ハノイ国家大学 外国語大学科学紀*, 30 (2010) 46.

Khảo sát cách dùng của “NO”, “KOTO” trong các giáo trình tiếng Nhật sơ cấp - Hướng đến việc biên soạn lại nội dung giáo trình

Trần Thị Minh Phương

Khoa Ngôn ngữ và Văn hóa Phương Đông, Trường Đại học Ngoại ngữ,
Đại học Quốc gia Hà Nội, Đường Phạm Văn Đồng, Cầu Giấy, Hà Nội, Việt Nam

Bài báo này bàn về sự hành chức của yếu tố danh hóa “No” và “Koto” trong tiếng Nhật. Qua khảo sát 6 cuốn giáo trình sơ cấp và 2 cuốn sách ngữ pháp, chúng tôi đã thu được kết quả như sau: một số mẫu câu mà các giáo trình nêu ra chỉ dùng được với “No” nhưng thực tế ngôn ngữ lại chứng minh điều ngược lại, nghĩa là vẫn dùng được với “Koto”. Ngoài ra, trong số các mẫu câu được đưa ra với “No” và “Koto”, có một số mẫu câu hoàn toàn không được sử dụng trong thực tế ngôn ngữ của người bản ngữ. Như vậy, vấn đề cần thiết đặt ra là cần phải rà soát lại tất cả các mẫu câu có liên quan đến “No” và “Koto”, đồng thời cần phải thay đổi nội dung giáo trình theo hướng bám sát nhu cầu sử dụng ngôn ngữ thực tế của người học.

Từ khóa. Danh hóa, giáo trình tiếng Nhật sơ cấp, thực trạng sử dụng ngôn ngữ của người bản ngữ, dữ liệu ngôn ngữ điện tử, nhu cầu vận dụng ngôn ngữ của người học.